

読売新聞社の全国世論調査(2~3月実施、郵送方式)で、9割を超す人が葬式や法要は簡素な方が良いと考えていることがわかった。実際の葬儀でも「家族葬」が一般的になるなど、そうした傾向が見られる。故人と親しい人だけで別れを告げるという、原点回帰の意味もあるようだ。

横浜市の会社役員男性(56)は昨年10月、91歳で亡くなった母の葬儀を、邸宅型の葬儀施設・ラステル久保山新館で行った。「邸宅型」は普通の家のように居間などがあり、一晚を過ごすこともできる小規模な葬儀場で、全国に広まりつつある。

ラステル久保山新館も和室やキッチン、風呂、仮眠用の部屋などがあり、冷蔵庫や洗濯機も備える。貸し切りで、通夜や告別式の間帯を除き、スタッフは立ち入らない。

通夜には肉親や親戚、ごく近い友人ら30人ほどが出席し、僧侶が読経した。親族ら20人ほどが施設で一晚を過ごし、翌日、告別式が行われた。昔は当たり前だった自宅での通夜に近い形だ。喪主の男性は「気兼ねなくお別れすることができました」と話す。

運営する「ニチリヨク」(東京)によると、昨年7

葬儀 家族中心へ回帰

本社世論調査「簡素がよい」9割

広がる邸宅型式場

月のオープン以来、50組以上が利用した。多くは参列者が30人程度で、費用は通夜、告別式を合わせ約70万円(食事代別)。支配人の横田直彦さんは「こころな、ゆっくり故人をしのぶことができます」と話す。

者の葬儀。ひつぎに孫がクレヨンで絵を描いたり、隣に布団を敷いて寝たりと、家族は思い思いに過ごす。今年3月に100歳で亡くなった義母の葬儀をここで行った同市内の女性(75)は、「お母さんと一晚、自宅と一緒に過ごしているような雰囲気です、これまでの感謝の気持ちをしっかりと伝えることができた」と振

り返る。運営する「ファミリー葬」(神戸市)は、神戸市や堺市にも同様の施設を持つ。取締役部長の河野好秀さんは「単なる簡素化ではなく、故人とその家族を第一に考えた葬儀が増えていきます」と話す。

本社の全国世論調査によると、「自分の葬式にはどのような人に参列してほしいか」という問いに、「家族、親戚、親しい友人・知人」と答えた人が35%と最も多く、「家族だけ」(16%)、「家族と親戚」(14%)と合わせ、6割以上が家族中心の葬儀を望んでいた。

一方、「仕事の関係者や近所・地域の人など」の参列を望む人は15%。調査では葬儀のあり方について「会社の同僚や上司の家族

の葬式に行かなければならない慣行はおかしい。自分なら、本当に親しかった人だけに参列してもらいたい」(30歳代女性)との意見も寄せられた。

葬送ジャーナリストの碑文谷創さんは「高齢で亡くなる方が多くなり、葬儀に対する考え方が年配の人を中心に変化している。故人をよく知らない人が参列する大規模な葬儀への疑問を感じているのでは」と指摘。

一方で「東日本大震災を機に、死について考える機会が増えたという人は多い。故人との関係を見つめ直す時間として、葬儀を大切にしよ」という人は今後増えるのではないかと話している。(崎長敬志、古岡三枝子、小野仁)



●リビング(手前)と式場がつながっており、くつろいだ雰囲気の中で故人をしのぶことができる(大阪市平野区のファミリー葬平野で)



●和室や仮眠用の寝室があって自宅のように過ごせるラステル久保山新館(横浜市西区で)